

原田の森と古本屋

—足立巻一『親友記』の一側面—

関西学院大学名誉教授・元文学部教授・学院史編纂室共同研究員

大橋 毅彦

関西学院が神戸の上筒井から阪急沿線の上ヶ原に移転する昭和の初めの頃おい、彼自身は中学部の生徒だったが、学校からの帰りに立ち寄る古本屋をもう一つの〈教場〉として精神的な成長や脱皮を遂げていく一人の少年とその交友圏——足立巻一^{けんいち}（1913-1985）の自伝的小説『親友記』（新潮社、1984・2）の前半には、そのように紹介できそうな場面がいくつか用意されている。

日本のエッチングの開拓者となった神原浩に図画の授業を担当してもらった中学部の二年を終了、校地の上ヶ原への移転とともに三年生に進級した「わたし」は、「中学部の先輩」で「神戸新川の貧民窟」出身の井上増吉の詩集『日輪は再び昇る』を読んで、「世界がこれまでとはまったくちがった色彩で映りはじめてい」く感に打たれるが、そうした自身の覚醒にさらに拍車をかけた級友粕渕につれられて入ったのをきっかけに、「上筒井の電車通の浜側にある大きな古本屋」白雲堂の年少の常連となっていく。

「わたし」の自宅は西灘村の岩屋にあったから、学校の帰りにひとりでのぞいていかれる。粕渕に勧められて読んだ長編小説『海に生きる人々』が、神戸に育った自分には親しかった船の中に「水夫たちのひどい生活」が隠されていることを描き出しているのに接して、その興奮冷めやらぬままに、その作者葉山嘉樹のもう一つの代表作「淫売婦」が収録された小説集を買ったのを手始めに、平林初之輔の『日本自由主義発達史』や、葉山や岩藤雪夫ら、いわゆる〈文戦派〉と呼ばれるプロレタリア作家たちの機関誌『文芸戦線』の新刊本も入手する。そして、前者を読んでみると、勤王攘夷派の連中がなぜ開国に一変したかについて、小学校以来の国史教科書だけでは分からなかったその理由がわかりやすく書かれていて、「爽快感」を味わう。

さらに、「わたし」の知的な冒険の場を活気づけるべく登場するユニークな存在が、黒の詰襟、色が白くて丸刈りにした朝鮮人の「ほんさん」（少年店員）である。店に他の客がいないうち、『文芸戦線』の古雑誌をめくる「わたし」に対して「そんな本は、もうつまらんよ」と言った彼は、その代りに小林多喜二の短編「一九二八年三月十五日」が掲載された『戦旗』を新聞紙にくるんでそっと差し出す。またあるときは低い声で「関中はダメね、県商は三年で党員が出たよ」と挑発する。

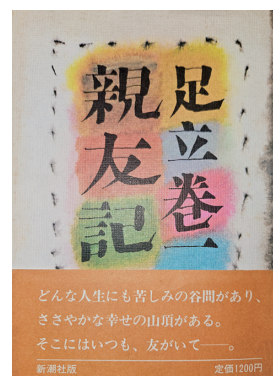
こんな風に中学部の学び舎の一步外に出れば、時代の嵐が吹き付けてくる。事情は原田の森に沿う水道筋にできた

新しい二軒の古本屋の場合でも同じ、すなわちエスペロ書店に通い出した「わたし」は店の主人からエスぺラント語の手ほどきを受けながら、その合間にはザメンホフという名前を聞きかじり、字仁^{うに}菅書店では「学生さん、これ、伏せ字が全部埋めてあります」と言われて、いそいそとレーニンの『何を為すべきか』を手に入れる。

原田の森の古本屋からかけられたこうした深情けは、「わたし」が中学生生活を終え、伊勢の皇学館の入試に落ちた後も途切れない。すでにその頃には新聞に短歌を投稿する味を覚え、学外で知り合った同好の少年たちと同人誌をつくり出していた「わたし」は、その何度目かの試みとして、詩だけの同人雑誌『青騎兵』創刊に情熱を傾けていく。そして、その発行所兼印刷所となったのが、同人の一人がこれまた水道筋に開いた博行堂書店という古本屋であった。

博行堂は間口一間半の狭い店で、その奥はまるで洞窟のよう。しかし、売り台の奥の二畳敷の畳の間に謄写版を置いて『青騎兵・1』という表紙の印刷に「わたし」たちが取り掛かったその日、「原田の森は燃えたつような新緑に輝き、それにめずらしく風があり、木々は青いタテガミの馬のように揺れた」のだった。生後すぐに父とは死別、母は他家に嫁いだため、伯父の家に身を寄せようやく神戸に定住、その後再び母と暮らし始めるようになるという幼少年期を経てきた「わたし」は、「中学の教室にあふれる無邪気さ、明るさ」の中にあっては異質な存在であった。そして、そこから一歩踏み出し短歌や詩の魅力のとりこになっていく途上で出会った少年たちもまた、それぞれの不遇を背負いながらも、自らへの慰めと励ましとをその中に求めようとしている。そんな彼らの情熱に煽られて原田の森が躍動しているのである。

（おおはし たけひこ）



足立巻一著『親友記』（新潮社、1984）